

イデアチオンの二側面

— フッサールによる近代抽象理論批判 —

星 揚 一 郎

1. はじめに

敢えて人口に膾炙した文言を用いるならば、フッサールによるところの「諸々の原理の中の原理」とは、「原的に与えるはたらきをする直観はすべて、認識の正当性の源泉であるということ」daß jede originär gebende Anschauung eine Rechtsquelle der Erkenntnis sei, …, つまり『『直観』Intuitionのうちでわれわれに対して原的に…呈示されるものはすべて、そのものが自らを与えるままに、しかもそのものが自らを現に da 与える範囲でのみ、端的に受け取られねばならないということ』である (Ideen I, S.51 Vgl, S.11)¹¹⁾。なぜこのことが原理であるのかといえば、「考えられる限りのいかなる理論も」その真理を再度得ようとするならば「原的所与性から汲み取ってくる」しかないからだとフッサールは言う (ibid)。

この原理を、経験的な、個物に関する個的直観にとどめることなく「本質を原的に与える観取 Erschauung」にまで拡張したことにフッサールの特徴がある (ibid, SS.13,50 usw.)。この拡張は、「厳密な学としての哲学」を確立する基礎固めの方法として、フッサールの思索を通して見いだされる。フッサールにおいては「個的もしくは経験的直観 die individuelle oder erfahrende Anschauung によって与えられるものが個的对象」であるのに対して、「本質直観 Wesensanschauung によって与えられるものが純粹本質」という「新種の対象」にはほかならないと言われる (ibid, S.14)。この「本質直観」を、フッサールは「イデアチオン」(Ideation) と随所で言い換えており (ibid, SS.13,50), それは「本質視」Wesensschauung, 「本質観取」(ibid, S.13) とも呼ばれる。また、初期の『論理学研究』¹²⁾から晩年の『経験と判断』¹³⁾、『形式および超越論的論理学』(Hua. Bd17)

にいたるまで「イデアチオン」が登場することもまた、われわれがそれをフッサールの鍵概念の一つであるとする事の所以である。

本稿では、近年(夙に日本の)研究者によって扱われることが少ないものの、重要だと思われる「イデアチオン」概念を闡明する。「イデアチオン」は、(フッサールその人がそうしているので)教科書的には一様の捉え方しかなされていない。しかしながら、比較的初期の著作、つまり『論理学研究』と『意味論講義』¹⁴⁾に遡って考察することによって、「イデアチオン」に混在する二つのタイプを洗い出してみたい。その際、フッサールによって批判の対象となっている「近代抽象理論」を視野に入れつつ考察をすすめる。というのは、一連の「近代抽象理論」が、そこからフッサールが明らかに多くの影響を受けているにもかかわらず、あるいは影響を受けているからこそ、批判の矢面に立たされており、それを踏み台にしてフッサール現象学の新しい局面が拓かれたとも言えることができるからである。

論述の内容・順序として、以下の三点を挙げておく。第一に、通説となっている「イデアチオン」の紹介をし、次いで初期の「イデアチオン」と通説との差異を示し、そのうえで「近世抽象理論」と「イデアチオン」との差異を論じる。

2. 中期以降のイデアチオン

『イデー』第一巻において、「経験科学」の対象となるべき「個的なもの」(あるいは、一度限りの対象である「ここにあるこのもの!」*ein dies da!*)は「偶然的なもの」*Zufälliges*と言われる。なぜ、われわれの眼前に実在するこの「個的なもの」が偶然的なのかと言えば、「それ固有の本質からすれば、まったく別の在り方をすることができたはずのもの」であるにもかかわらず、たまたま現にこのような在り方をしているにすぎないからである。しかし「いかなる偶然的なものであれ、それがまさにある本質をもつということ、このことがその意味 Sinn に属している」(Id, S.9)¹⁵⁾。「偶然的なものの意味」とは何かといえば、個的对象の可能的な在り方であると思われる。そうした「可能的経験の対象の本質に初めから属している」「規則」が一見恣意的に思われる諸対象の在り方を「限定」しているのである (Vgl. Id, S.12)。

例えば、動物園の檻のなかにいるライオンは、まったく別の在り方が…サバンナを駈けめぐったり、木陰で昼寝をしたり…できたはずなのに、たまたま捕えられて「今」「ここに」いるにすぎない。しかしながら、ライオンの固有の本質からすれば、水中に長時間潜っていたり、空を飛んだりすることはできない。この限定をフッサールは「個的なもの」の本質に求めているのである。

本質を把握する仕方は『イデー』では端的に次のように記述されているにすぎない。「例えば、どの音にも、本来、本質があり、その最上位には音一般、ないしはむしろ聴覚的なもの *Akustisches* 一般といった普遍の本質がある」。この普遍の本質は「(個別的に、もしくは他の音との比較によって『共通のもの』として) 取り出して見られるはずの契機である」(Id, S.13)。この丸括弧内の手続きが最も具体的に記されているのは、『経験と判断』第八七～九一節、および『現象学的心理学』⁶⁾第九節である。『経験と判断』の中から、「アイデアチオンの過程に含まれる主要な三段階」を概観してみる (EU, S.419, Vgl. PP, S.78)

①「変更体の多様性を産出しつつ通覧する」段階

アイデアチオンは「経験ないしは想像された対象的なものを任意の範例 *das belibige Exempel* に変える」ことから始まる。そして「その範例は、のちの変更を導く役割を果たす『原像』、つまり「開かれた無限に多様な変項の生産のための出発点」という性格を含む。こうした範例から出発して、純粋な空想(変更作用 *Variation*) においてそれを「自由に」変形すると、つぎつぎと新たな範例に類似した像が獲得される (EU, S.410f)。

②「絶え間ない重ね合わせの過程で(本質を) 統一的に結び合わせる」段階

ただし、この変更作用は「現実に無限に進めることが要求されているわけではないし、一切の変項の産出を要求されているわけではない」(ibid, S.411)。変更作用の進行とともに示されることは、「あとから形成されたものの多様性を貫いてひとつの統一体があるということ」および「ある事物の原型を自由に変更する際には、一つの不変項が必然的一般的な形式として維持されねばならない」ということである (ibid, S.412)。同じことを作用の側面から言えば、ひとつの原型・範例についての任意の変更作用という形態を維持しているかぎり、

個々の変更作用は「同じ」変更作用とすることができる。

③「諸々の差異に対して一致するところのものを取り出して見やりつつ能動的に同定化する」段階

「諸々の変項は現実に直観のなかに現われているのだが、それらをともなって構成されている変更作用の開かれたプロセスという基盤の上に」「一般的なものをエイドス（形相）として観取するという、より高次の段階が基づけられている」（*ibid.*, S.413）。先に見たように、諸々の変項は変更作用の進行にしたがって相互に似通った部分を個々に残している。こうした重なり合う部分は、変更作用のプロセスにおいて「純粹に受動的にひとつの総合的な統一体」に入っていく。このように「同じもの」として「受動的に前もって構成された」形相を、「能動的に観ながら *aktiv schauend* 把握すること」をもって、アイデアチオンのプロセスが完遂される（*ibid.*, S.414）。フィンクは、この過程の後半を「変更作用が動いてきた可能性の空間に注目することであり、一切の変項を担う不変更体を主題とすることである」と言う（*Fink*, S.216）⁽⁷⁾。

『イデー』で示唆されていた音の例に戻ろう。『経験と判断』でのアイデアチオンのプロセスにしたがえば、任意のある音を範例として採用するところから出発する。ここではピアノのドの音を取りあげてみる。ついで、その音をエレクトーンのドの音、木琴のドの音、トランペットのドの音という具合に「純粹に」変更していき、さらにはドの音に限らず、他の音階の音に変更してみる。音は楽器を奏でるときに発せられるものに限らないので、音源の方を変更してみてもよいだろう。こうした諸変更にもかかわらず、重なり合う部分が音の本質であるが、それを原的に本質を与えるはたらきをする「直観」において把握するのである。

「音の場合には、音が一定の強さ、特定の音色、これこれの高さをもつためには、音が音色一般、強度一般、高さ一般を…相互に、かつ必然的に要求し合い、音の必然的構造を構成する諸特質の総体を…もっているものでなければならない」⁽⁸⁾。言うまでもなく、先に触れた「音一般」「聴覚的なもの一般」という最上位の「普遍的特質」もまた、この「構造」に属するはずである。音そのものは、波長測定などしないかぎり、客観的にその存在をわれわれに見えるかたちで呈しない

けれども、こうした存在者の本質をもアイデアチオンによって把握することができるということがわかる。

「対象の本質とは、対象の必然的構造である」(ibid.)。アイデアチオンとは、「あいまいな類型 *Typik* において前もって与えられる対象の領野の本質構造を確定する試み」(Fink, S.216) であり、突き進めれば各個物の属する「本質種別」、最終的には諸々の「領域」もしくは「カテゴリー」を区画付ける「最上位の本質一般性」を探求する方法である (Id, S.13)。

3. 『意味論講義』におけるアイデアチオン

以上の「まったく沈着冷静にすすめられるべき煩瑣な手続き」(Fink, S.216) が、まさに一般にアイデアチオンとして流布しているものである。

しかし、こうした「発生論的な」アイデアチオンに先んじて、より早い時期からアイデアチオンという概念が用いられていたことを冒頭で示唆しておいた。『イデー』に先立つこと5年、1908年の『意味論講義』でのアイデアチオンを少し長くなるが引いておく。

『『黄金は黄色い』 *Gold ist gelb* と言表するとき、それを象徴的に判断しよう」と、直観的に判断しようとする、あるいはその直観性が部分的であれ、総体的であれ、十全的であれ、非十全的であれ、これらのうちのどの作用へと反省を向けたとしても、われわれはそこに共通の本質を見いだす。この共通の本質を、同じ判断と言う。つまり、その判断とは、{作用性格のうえで} 内容的に異なった判断諸作用の多様性に対する、スペチエス的(意識現象的)な統一体である。反省やアイデアチオンが教示するように、これらいっさいの作用には、共通の内的本質、つまり(意識現象的な)意味質料がある。まさにこの同じものが、対応する変様を被ったどの判断にも見いだされ、それゆえ信念の欠けた言表理解作用にも見いだされる。そこで、もうひとつ別の観点からみるならば、われわれが判断と単なる判断思惟 *bloÙe Urteilsgedanken* …『単なる』とはいってもやはり、*Gold ist gelb* という内容の…とを互いに比較する際には、そこに明証的に *evident* 共通のものを見いだす。それを、とりわけ(意識現象的)意味と名付ける。まさにその意

味こそが『内容』であり、しかも、イデー化的抽象によって何かとして諸作用から取得されるもの *Entnommenes* である。この本質は、われわれが言表作用を遂行しようと言表思惟作用を遂行しようとするところで必然的に遂行されようが、理解されようが、いっさいの言表には意味 *Bedeutung* がある。このことは『いっさいの事物には空間形態がある』というのと同じように自明的である。この命題はたしかな意味で明証的な『分析』命題である」(VB, S.87)。

一読して容易に解されるように、本質といわれていることは、先の一連のイデアチオンと変わりはない。つまり、一つの範例を取り上げて、それを任意に変更しても変わらぬ不変体が、いわゆる本質といわれている。

ただし、この引用においてふたつのことが注意されねばならない。ひとつは、自由変更されているのが、判断作用の対象ではなく、作用(意識のはたらき)そのものだという点である。つまり、「反省は作用に向けられている」(S.143)。「断定」「推測」「懐疑」といった具合に作用の様態を変化させてみても変わらぬもの、さらに「だれがその作用を遂行しようとも、いつ遂行しようとも」変わらぬものが、「スペチエス的な統一性」ないし「意味質料」と言われる (S.88)。ここで「黄金は黄色である」*Gold ist gelb* という内容は、眼前にほんものの黄金を置き、その知覚に基づいてこのように判断しようとする、全く黄金を見たことのない人が空想して判断しようとする変わらないのである。とはいえ、ここでわれわれに観取されたものは、意識作用の変様を通覧してはいるものの、第一次的な意識作用の対象としての「スペチエス的な統一性」にほかならない。

第二に注意すべきことは、前半では「反省」ないし「イデアチオン」に与えられるものが「スペチエス的な統一性」であったのに対して、後半では「イデー化的抽象」*ideierende Abstraktion* による「意味」*Bedeutung* の別出という組合せで記述されていることである。前半部と後半部との違いはどこにあるのだろうか。後半部は「信念の欠けた言語理解作用」を俎上にのせることから始めている。つまり、前半部よりは高次の次元に、判断を基盤にして成立する言語表象の次元に展開しているといえることができる。その際には、引用文中に示唆されているように、話者や聴取者が「黄金は黄色い」という話題(内容)を必ずしも確信したり、

信じていたりしなくてもよいわけで、きわめて中立的、一般的なニュアンスをこめて「意味」という言葉が用いられているのである。

ところで、アイデアチオンでわれわれが獲得するとされた「スペチエスの統一体」「意味質料」「意味」に対して、いずれも「意識現象的な」phansisch という語をフッサールが用いていることにはどのような意味があるのだろうか。「意識現象的」という術語もまた先の「取得する」と同じように、きわめて限定されたテキストにしか現われておらず、具体的にはこの『意味論講義』のほかには、『イデー』Iの付録11に見られるにすぎない。この付録は、1912年7月に「意識現象的と存在的、つまり実的な含有物と理念的な含有物、作用性質と素材」という小見出しをつけられて書かれたものである。

はかなく流動的な意識作用の側面から抽象された「意識現象的」なものは、いかにして理念性を保つというのだろうか。フッサールが批判していた心理主義的な思考にフッサール自らが陥っているのではないだろうか。『論理学研究』での「近代抽象理論」へのフッサールの批判を見ることによって、フッサールの独自性を再度浮き彫りにしてみたい。

4. 近代の抽象理論とアイデアチオンとの相違

ここでは、近代抽象理論の先駆をなしたジョン・ロックの抽象理論を挙げて、フッサールのアイデアチオンを考えてみる。『論理学研究』第二巻の二において、フッサールはロックの抽象観念を「普遍者を心理学的に実体化したものであり」「不合理なもの」と批判している (LU2, SS.127ff.)。

フッサールによれば、ロックの「実体化」は次のようにして生じたものである。¹⁹⁾ レアルな現実性においては普遍者は存在せず、個体的な事物だけがレアルに存在している。けれども、普遍的なものがあるように思われるのは、実はこうした諸々の個体的事物が、「同じもの」として、あるいは「似たもの」として感覚されることがあるという理由から、種と類という仕方で秩序づけられていることによる。われわれは、実際に、こうして分類されたものを普通名詞で呼んでいる。そして、普遍的名辞 *der allgemeine Name* は、あるクラスの対象に共通するひとつの同

じメルクマール（およびその複合）を介してそれらの対象に関係している。とすれば、事物は諸々のメルクマールから成る複合として現われてくるが、そのとき部分的な個々のメルクマールの観念を分離して、そのひとつひとつを普遍的な意味として言葉に結びつけるような「抽象の能力」がわれわれに備わっているということになる。たとえば、三角形という名前と結びつけられる一般観念について考えてみる。すると、個別的なものとしての諸々の三角形から抽象されてくるメルクマールは、直角三角形でも、二等辺三角形でも、正三角形でもありうるわけで、そのどれにとっても妥当するような普遍観念は、決して個別的なものからの抽象によっては得られないというアポリアに陥ってしまう。これをロックは人間の不完全性に帰する (Vgl. *ibid.* 2-2 Kap, Sek.9)。

こうしたロックの抽象理論に対するフッサールの批判は都合六件述べられているが (LU, S.133f.)、その中で的を射ていると思われるのはとくに次の二点である。まず第一にロックが「観念を内的知覚の客観」と定義することによって、そもそも初めから対象の理念性（普遍者）を心理学的生 *Leben* のひとつの内容に還元してしまうことに由来する困難を指摘する。無時間的、遍在的な普遍者が、時間的ではない意識流に還元されることへの危惧は、フッサールの心理学主義批判に一貫してみられる観点である。

第二に重要なのは、「ロックにおいては表象と表象されたものそのものが混同されている」という指摘である。この混同の原因として、フッサールは「対象に帰属するメルクマールを、表象作用の感性的な核を形成する内在的内容（感覚）と取り違えたことによる」ことを挙げている。三角形の例で言えば、『『三角形』という名辞の普遍的意味が特定の直観的な個別表象と混同された』ために、任意に選ばれた三角形のメルクマールが三角形そのものの普遍的性質と「すり替え」られてしまったのである (LU, S.140)。

5. フッサールにおけるイデアチオンの二側面

ところで、フッサールは、このような辛辣なロック批判の内容を自ら被ることなく、いかにして「イデアチオン」という一種の抽象の方法を確立したのである

うか。最後に、再度、このことを確認しておきたい。というのも、先の「意識現象的」な議論に関して言えば、意識の作用面からの抽象であるがゆえに、ロックへの批判がそのままそっくりフッサール自身に返ってくるようにも思われるからである。

個的直観からイデアチオンへの転化、あるいはイデアチオンから個的直観へのまなざしの方向転換の可能性が自由に開かれていることによって、イデアチオンのプロセスにおいては個物を現実存在するものとして定立することなく自由変更できるということを先に述べた。このことによって、事実的なレベルでなく、対象を定立することのない本質・形相的な「対象の可能性の活動空間」(Fink, S. 216)をわれわれは手に入れることができたのである。それゆえに、あくまでも経験的な議論に固執せざるをえないロックが陥った「不合理」は、フッサールには問題にならない。イデアチオンで原的に与えられるものが本質という新種の対象であるということも、このことによって保証されているのだ。

フッサールのイデアチオンで獲得される本質は、決して意識作用に還元されるようなものではない。拙論全体を通して示唆してきたように(とくに第二節)、フッサールによれば、対象(意識の外の存在者)に属する本質こそが、その対象のありようを決めているのである。それではなぜ「意識現象的」な仕方でイデアチオンが語られたのだろうか。それは、ロックに対する批判でも示唆されていたように、われわれが普遍者を把握するのはわれわれの認識を介するしかないからである。したがって、その時には認識と意識作用に還元されない存在者との関係が問題とならざるをえない。作用から取得された「意識現象的」な「スペチエスの統一性」には、「存在的」な本質が対応しているとフッサールは言う。「現象についての本質的な一切の考察には、意識現象的、存在的という二重の方向がある。つまり、一方では現象をその意識現象的な構成要素に関して本質的に分析し記述することができ、もう一方では、この意識現象的な構成要素のおかげで意識される存在的な構成要素を際立たせ、場合によっては理念として、それ自体、立てることができる。詳述するならば、存在的理念は、意識現象的構成要素を伴った現象からイデー化された理念に『含まれている』限り、意識現象的要素と相関的な理念である」(Id. S.542f.)。こうして意識現象的な理念は、存在的な理念、

つまり対象カテゴリーへの通路として考えられる。したがって存在的理念は単に意識「作用」から取得される理念ではない。ここで、二つのイデアチオンが語られていることに注意すべきである。

第三節で触れた『意味論講義』では、こうした存在的なイデアチオンは次のように語られている。『『イングランドの政治家』はこの表象から『取得されるもの』、表象においてイデアチオンによって得られうるものである。つまり、イデアチオンによってわたしは、1. 表象の内的本質に属するもの（意味契機、表象のスペチェス、表象に方向をあたえるもの）を把捉する。2. もう一方で、わたしは、そこで生きている表象に基づいて、意味を『意味されたものそのもの』、そこで与えられる同一的なものとして取得する』(VB, S.159)。「われわれはいっさいのこれらの作用からイデアチオンによって、しかも今度は現出論的なイデアチオンではなく、現象学的なイデアチオンによって同一的なものを取得することができるであろう」(VB, S.118)。加えて、存在的・現象学的イデアチオンを言い換えて、「カテゴリー的イデアチオンにおいてあたえられたもの」は「新しく真正な明証」であるとも言われる (Vgl. VB, S.93)。

ここで存在的イデアチオンに与えられるカテゴリー的対象性は、たとえば「イングランドの政治家として意味され表現されている限りでのX」であり、意識表象的なイデアチオンに与えられるスペチェスでもないし、意味志向されたX・その人でもない¹¹¹。つまり、それは、基体をも含んだ「Xはpである」という判断としてカテゴリー的に構成された、より高次の次元で展開しているということが出来る。その際、その内容は（第三節の引用文中の例のように）必ずしも確信されたり、信じられたりしていなくてもよい。空虚な言明に対する「記号論的な志向が充実されるのは、純粹に感性的な志向によってではなくカテゴリー的な志向によってである」(Bernet, S.35)¹¹²。

もちろん、ここまでの論述で分かるように、ここで得られた第二のイデアチオンに与えられるものは、いわゆる本質にとどまらない。しかしながら、本質直観と言い換えられる、イデアチオンを可能にする背景には、こうした隠された二重のイデアチオンの能作が見いだされるべきなのである。

6. おわりに

われわれは、フッサールの生前に公刊された『イデー』Iや『経験と判断』において馴染んでいたイデアチオンにふたつの側面があることを知ることによって、フッサール現象学が、ロック的な不合理に陥らない、明証の問題への方法的な糸口を有していることを確認した。見方によれば、ロック的な不合理を避けるために設けられた、本質直観の通説に隠されたこの区別こそ、厳密学としての哲学の基礎付けに貢献するものである。フッサールの思索の展開としては『イデー』のノエシス—ノエマ論にこの「構成の理論の課題」が引き継がれているが、わたしとしては拙論で詳述したように重要な問題をはらむ前段階にしばらく留まって、ここに新たな端緒を拓くべく考察を続けることにする。

註

- (1) Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch*, hrsg. von Schumann, *Husserliana* Bd.3/1, Martinus Nijhoff, 1976, Erste Aufl. 1913.『イデー』I-1, I-2, 渡邊二郎訳, みずず書房 (Id.と略す)
- (2) Edmund Husserl, *Logische Untersuchungen Zweiter Band*, *Husserliana* Bd. 19/1, 19/2, Martinus Nijhoff, 1984, erste Aufl. 1900/01.『論理学研究』1～4, 立松弘孝ほか訳, みずず書房 (LU2.と略す) 二冊に分かれているが, 通して頁数がつけられているので, いずれの分冊かは逐一指摘しない。
- (3) Edmund Husserl, *Erfahrung und Urteil*, Felix Meiner Verlag, 1985 Erste Aufl. 1939.『経験と判断』長谷川宏訳, 河出書房新社 (EUと略す)
- (4) Edmund Husserl, *Vorlesungen über den Bedeutungslehre Sommersemester 1908*, *Husserliana* Bd.26, Martinus Nijhoff, 1986 (VBと略す)
- (5) 「偶然性は事実性とも呼ばれるのだが, そうした偶然性の意味は, それ (偶然性) が, ある必然性と相関的に連関しているということに限定されている」(Id, S.12)。フィンを援用した, 『イデー』I, 9頁～12頁の理解については次の論文から大きな示唆を受けた。宮原 勇「超越論哲学としての現象学の可能性, フッサールにおける意味と形相の概念について」, 日本倫理学会編『倫理学年報』第33号, 1984年, 所収, 69～83頁。「意味」とは「経験的対象が, 認識され, 理解される可能性の制約」であるのに対して, 「形相・本質」とは「個別的対象の存在そのものを, 可能にしている可能性の

枠組み」なのである (ibid. S.78)。

- (6) Edmund Husserl, *Phänomenologische Psychologie*, *Husserliana* Bd.9, Martinus Nijhoff, 1968. (PPと略す)
- (7) Eugen Fink, *Studien zur phänomenologie 1930–1939*, *Phaenomenologica* Bd.21, Kluwer Academic Publishers, 1966. 『フッサールの現象学』, 新田・小池訳, 以文社 (Finkと略す)
- (8) Emmanuel Lévinas, *La théorie de l'intuition dans la phénoménologie de Husserl*, S.159. 『フッサール現象学の直観理論』, 佐藤・桑野訳, 法政大学出版社
- (9) Vgl. John Locke, *An Essey concerning Human Understanding*, Oxford University Press, 1975, erste Aufl. 1690. 『人間悟性論』 1～4, 大概春彦訳, 岩波文庫 bes. Buch 4, 7–9.
- (10) Wolfgang Stegmüller, *Hauptströmungen der Gegenwartsphilosophie*, Alfred Kroener Verlag, 1975, S.118. 『現代哲学の主潮流』 第一巻, 中埜ほか訳, 法政大学出版社
- (11) Rudolf Bernet, *Perception, Categorical Intuition, and Truth in Husserl's Sixth Logical Investigation*, in: *The Collegium Phaenomenologicum The First Ten Years*, *Phaenomenologica* Bd.105, Kluwer Academic Publishers, 1988, SS.33–46 (Bernetと略す) Vgl. 「知覚に基づいた判断を表現した, 厳密な意味での言語的記号は, 知覚そのものを表現するのではなく, 判断の意味を表現しているのである」(S.35)。
- (12) この点に関して, 筆者は, 第五十五回日本哲学会において「フッサールにおける存在的意味」と題した口頭発表をしたので, 詳論はそちらに譲ることとする。存在的イデアチオンにおいて与えられるものが存在的意味にほかならず, それにスペチエスとしての意味が意識の作用面に対応している。本文中にも示唆したが, 高次のスペチエスが考えられるのは, あくまでも存在的意味とのかかわりにおいてのみであり, スペチエスに対する存在的意味の優位を語るのが発表の主旨のひとつであった。

翻訳のあるものは註を含めて参照させていただいた。ただし, 訳語や言い回しの統一のためほとんどの部分を改訳している。

(ほし よういちろう, 大学院文学研究科哲学専攻)